

平成17年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

## 塔婆の話

塔婆は「卒塔婆<sup>そとうば</sup>」ともいいますが、お彼岸やお盆、年回忌供養等の時にお墓に立てるので皆さんもよくご存知のことと思います。この塔婆のいわれはインドの昔の言葉の梵語<sup>ほんご</sup>で「ストゥーパ」を音写<sup>おんしゃ</sup>したものとされています。音写というのは、そのインドの言葉の音<sup>おん</sup>を中国の当時の仏教学者が訳さずに漢字で音を充てたことをいいます。「ストゥーパ」を「卒塔婆」の音で充てました。『卒都婆』や『藪斗婆』と充てる時もあったようです。したがって充てられた漢字の意味とは関わりはありません。

さてその「ストゥーパ」とは古代インドで土饅頭型に盛り上げたお墓のことでしたが、お釈迦様が亡くなってからは記念物的な要素が強くなり、釈迦の遺品や遺骨を埋葬した上に建てられた塔になっていったことから「ストゥーパ」と呼んでいました。それが日本に伝えられ五重塔や三重塔、多宝塔のような形になり小さい物では五輪塔のようになってきたといわれています。現在のお墓に立てる塔婆は上部と下部が三角に切られ上部に4か所の切れ込みが入っています。これは五輪塔のシルエットを模したともいわれています。ただ五重塔のような建造物や五輪塔のような石の卒塔婆と、板の卒塔婆は起源が別だという説もあります。それは古代、死者の靈魂の依代<sup>よりしろ</sup>として枝付きの木を埋葬者の近くに立てたことからの変化でウレツキトーバ（梢付塔婆）に由来するという説です。青梅でも以前は三十三回忌には枝付きの杉の幼木の表面を削りそこに戒名を書いて立てたとか、塔婆の頭に杉の枝を付けたという話を聞いています。

さて今、墓地の塔婆に書かれている文字を見ると宗派により様々



卒塔婆

（裏面に続く）

です。分かりやすいところでは『南無阿彌陀佛』のように仏様の文字が塔婆の頭部に書かれていることがあります。これは青梅では時宗じしゅうの乗願寺（勝沼3丁目）のように主に念仏を唱える宗派で書きます。ただ十三仏のうち一仏として仏様の名が書かれている場合もあります。それは百か日・一周忌・三回忌などの年回忌にはそれぞれ観音菩薩かんのんぼさつ、勢至菩薩せいしぼさつ、阿彌陀如来あみだにょらいのようにその年回忌を司る仏様がいて、その年回忌に合った仏名を書く場合です。また『大円鏡智』だいえんきょうち、『妙觀察智』みょうかんさつちのように仏様の悟った智慧を表した文字を書くのは曹洞宗そうとうしゅうや臨済宗りんざいしゅうなど禅宗系の寺に多く見られ、塔婆の裏にも漢文の禅語を書く寺があります。一方、真言宗しんごんしゅうや天台宗てんだいしゅうなどの密教系の寺には梵字ぼんじという文字で書かれています。大抵はキャ・カ・ラ・バ・アと発音する梵語で、我々人間や大地を構成する要素の五大である空・風・火・水・地を意味する言葉が上から順に塔婆の頭部に書かれているものです。裏面にも大日如来を表すバンという梵字を長細く書き、その下に地獄の苦悩や救いを司る仏様や真言を梵字で書きます。また人が亡くなって初七日から四十九日までの七本塔婆も十三仏の最初の不動明王から七番目の薬師如来までを書くものがあります。甘露門かんるもんというお経の中に出てくる七如来しちにょらいを書く場合には、梵字では種子しゅじといい一文字で仏様を表す文字を頭を書くなど、宗派で色々な書き方が有りますが、どの宗派においても亡くなった人の成仏や供養を祈ることの現れだといえます。

（文責 棚橋正道）